

## 対馬中部の対外戦争関連神社の縁起説と現況に関して（前編）

徳 竹 由 明

長崎県の離島対馬には、大陸（朝鮮半島）と日本（九州）の結節点であるという地域特性上、神功皇后「三韓出兵」・蒙古襲来等、架空のものであれ歴史的事実のものであれ、対外戦争に纏わる言説が多く存する。神社の中にも縁起説にそうした対外戦争言説を纏ったものが数多存する。そうした神社の内、本誌の第五卷第二号・第五六卷第二号にて、対馬の中心地である厳原市街地の神功皇后「三韓出兵」に纏わる縁起説を有する神社については現況の報告と縁起説の検討を行った<sup>①</sup>。そこで本稿では、厳原以北・佐賀以南の対外戦争言説を纏う縁起説を有する神社で踏査を行うことが出来た南室島神社・難知住吉神社・その境内社和多都美神社・仁位浜殿神社・鴨居瀬住吉神社・佐賀宗像八幡宮のうち、後二社は次号に回し、前四社について、対馬の対外戦争言説に関する旧稿<sup>②</sup>を踏まえつつ、諸書に載るその縁起説を提示して簡単に考察を加え、二〇二二年七月・八月、及び二三年四月・五月実施の実地踏査での調査結果や写真を交えて近況の報告を行いたい。

以下考察の対象とする文献は、対馬藩三代藩主義真の命で加納貞清編、貞享三（一六八六）年成立の対馬の神

社誌『対州神社誌』（以下「対」と略称）、貝原好古編・元禄二（一六八九）自序の『八幡宮本紀』（以下「八」と略称）、木下順庵門下の対馬藩儒・陶山訥庵編、元禄十二（一六九九）年成立、享保二（一七一七）年増訂の対馬の地誌『津島紀略』（以下「略」と略称）、対馬藩総官司職藤斎延の長子定房編、享保八（一七二三）年成立の史書『対州編年略』（以下「編」と略称）、総官司職藤斎長及び神社奉行一宮藤馬編、宝暦十（一七六〇）年成立の対馬の神社誌『対馬国大小神社帳』（以下「帳」と略称）、斎長の長子で総官司職の藤仲郷編、天明年間（一七八一〜八九）成立の対馬の神社誌『対馬州神社大帳』（以下「大」と略称）、藤仲郷編、寛政二（一七九〇）年成立の対馬の地誌『対州古蹟集』（以下「古」と略称）、藤氏門人樋口直右衛門が対馬に来島した幕閣に提出するために編、文化年間（一八〇四〜一八）成立の『対馬州八幡宮御鎮座伝』（以下「鎮」と略称）、樋口の兄にして郡奉行平山東山が幕臣土屋帯刀の命で幕府に提出するために編、文化六（一八〇九）年成立の対馬の地誌『津島紀事』（以下「紀」と略称）、幕吏鈴木又左衛門が文化年間の来島時に平山東山と遣り取りした手紙を編、文政二（一八一九）年成立の『笠淵奇聞』（以下「笠」と略称）、及び近代初頭に新政府の指示によって各府県が作成した『神社明細帳』（以下「明」。なお「明」は必要に応じて引用する）である（引用本文中の山カツコは割注を示す。また適宜傍線・太字等の処理を施した）。また現況の報告に関して昭和以降の石碑案内板等については、記された（刻された）人名のうち名前の部分は黒い四角で表示することとする。

## 二、南室島神社

まずは南室島神社から見ていきたい。

対・一、南室嶋大明神 神躰白石二 由緒不知

編・〇同八年乙酉蒙古來<sub>ル</sub>對馬嶋國府<sub>ニ</sub>、(卷第二「伏見院」)

帳・南室嶋大明神社 祭神 天日神命

末社

乙宮 恵比須 山形

大・南室嶋社 神体白石二、或云嶋大明神、弘安八乙酉年、祭之也、(與良郷・南室村)

古・異賊侵襲ノ年月ヲ傳ル<sub>ル</sub>如左

……(中略)……

後宇多帝弘安四年五月、蒙古高麗賊東西諸浦ニ來、

同七年、二万余人來、

同八年、数萬人來、

今按スルニ、四年辛巳ヨリ、七年甲申八年乙酉ノ間、三度來侵スル、安八一役ニシテ後軍追到ル者力、此賊大ニ州民ヲ害ス、殲戦ノ説、数多アリ、

紀・南室嶋神社 所祭之神一座、天日神ノ命、神體白石二箇、相傳テ云、島大明神ハ者國家擁護之靈神也、弘安八年乙酉異賊來<sub>テ</sub>侵ス<sub>ニ</sub>阿須浦<sub>ヲ</sub>、州民恟恟<sub>ト</sub>祈清<sub>ハ<sub>ル</sub>イ<sub>フ</sub>ヲ</sub>胡塵<sub>ヲ</sub>、忽然<sub>ト</sub>神見<sub>ハル</sub>ニ于此島<sub>ニ</sub>、是以州人負<sub>テ</sub>神威<sub>ヲ</sub>拒<sub>レ</sub>之、風波卒<sub>ニ</sub>起戰艦悉没<sub>ス</sub>、於<sub>レ</sub>是營<sub>ニ</sub>祠<sub>ヲ</sub>於此島<sub>ニ</sub>祭<sub>テ</sub>之、報<sub>ス</sub>神恩<sub>ヲ</sub>此役<sub>也</sub>、(卷之八「與良郷・南室村」)

明・〇南室島神社 所在 南室島

## 祭神 天日神命

由緒 弘安年間蒙古入寇の際神威を顕はし玉ひしに依り、祭り始むと云ひ傳ふ。昔は宗氏の特に崇敬せし社なり。

この南室島神社に関して、位置を記すのは「明」のみで、南室島とする（太字箇所）。祭神は「帳」・「紀」・「明」によれば「天日神命」（一重傍線部）、神体は「対」・「大」・「紀」によれば「白石」二個（同じく一重傍線部）である。縁起説は、「対」の段階では「由緒不知」であつたが、「紀」になると弘安八年に「異賊」が阿須浦を侵し、住民が祈ったところ風波が起つて賊の戦艦を沈めたため祀つたという。「明」では異賊を「蒙古」とし、その「蒙古」の撃退を「神威を顕はし玉ひ」と略述する（いずれも波線部）。なおこの弘安八年の「異賊（蒙古）」の対馬襲来は以前拙論にて論じたことがあるが、歴史的事実としては確認できず恐らくは『和漢合運』の叙述が基となつている。管見の限り「編」の記載が最も古く、「古」では数万人が襲来し弘安の役の後統部隊が襲来したのかとする（以上太線部）。なお「大」は弘安八年に祭り始めたとする（波線部）が、この「大」編集の時期に既に異国襲来に纏わる縁起説が存したかどうかは不明である。

南室島神社は、南室のバス停の脇の坂道を下りきつてコンクリート製の橋を渡った島の中に存する。橋を渡るとすぐ舗装道路の左手に数段の石段があり、その石段を登り未舗装の道をすぐ右に曲がり、さらにすぐ右に曲がつて登つていくと、島の頂と思われる箇所に、金色のプラスチック製鳥居（正面額「南室島大神」、右柱・正面「奉」、後面「棧原」、左柱（正面「納」、裏面「平成六年五月吉日」）、鳥居を抜けると全体が一続きにトタンで覆われた木製の拝殿と本殿が存す。本殿は石壇の上に存し、拝殿よりやや横幅が狭い。屋根は拝殿が青瓦屋根、本殿は波打った石材（石膏カ）で覆われているが、後ろに回ると青黒い瓦の屋根が一部見える。もとは別棟であつ

たものを纏めてトタンで囲い、本殿には保護のため石膏材のような屋根を載せたようである。拝殿の正面右には、蒙古襲来に関する木製案内板が付けられている。曰く「南室神社 厳原南室島鎮座ノ祭神 天日神命（あめのひのみたまのみこと）ノ由緒ノ天照大神の御子に天穗日命ありノ天日神命は天穗日命の御子にしノて対馬県主に任ぜられし神なりノ弘安八乙酉（昭和五十八年より約七百年前）ノ元軍賊徒厳原の東北阿須浦を侵すノ州人防禦策を失ふ。国難此の秋ノにあり海浜に屯する防兵此の憂をノ攘ん事を神明に祈誓せしに此の島にノ神現れ給ふ。此の神の大御稜威をノ仰ぎ奉り防ぎ戦ふに波浪俄に起リノ賊船悉く敗退して行く所知れず。ノ因て此の神恩を報せん爲祠を建てノ之を祭る。ノ数々の神威を顕はし賜つた神であるノ古は神事造営上より奉られ宗氏ノの特に崇敬せし社なりノ神殿 拝殿」。

### 三、鶏知住吉神社・和多都美神社

次に、鶏知の住吉神社・及びその境内社和多都美神社について見てみよう。

対・一 住吉大明神 神祇虚空蔵木像 脇ニ宗像金像有

一 勧請之事不相知

八・御船恙なく、與良郷の紫瀬戸に着給ひ、かの瀬戸の西岸にて海神を祭り給ふ。紫瀬戸は、與良郷の東北にあり。此瀬戸の海底に紫藻多く生ずる故、紫瀬戸と號す。又住吉の神社ある故に、住吉瀬戸ともいふ。こゝを以て此所にも社をたて、住吉大神を祝祀る。後世に至り、與良郷の東鶏知村に住吉の神社を建立し、瀬戸の社の神祇の鏡をつつせり。神名帳に所謂、下縣郡住吉神社 名神大 是也。瀬戸にも猶小社を存して古蹟

をとむ 以上對馬諸社傳説。(卷之二)

略・神功皇后シテ國府浦ニ而北ニ赴ムク之日、……(中略)……而到ル紫瀨戸ニ、於ニ是皇后祭ル海神ヲ於瀨

戸ノ西岸ニ、攝津州建ツル住吉神社ヲ之後、本州ニ亦タ建テ祠ヲ於此處ニ、此尊崇ク住吉神ヲ、其レ後建テ、

住吉神祠ヲ於雞知ニ而紫瀨戸モ亦タ存スル旧祠ヲ云フ(卷一「神社」)

編・海上無事而到鴨居瀨ニ在此浦有日、……(中略)……又於鴨居瀨祭住吉神(卷第一「仲哀天皇」)

帳・一 雞知住吉神社 祭神 神功皇后

#### 脇宮

宗像神社 祭神 市杵嶋姫田心姫湍津嶋媛

右官社 旧号 和多都美神社

大・一 住吉神社 神体木像 祭神 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。……(中略)……所載延喜式神名帳住吉神

社名神大、是也……(中略)……

一 宗像神社 神体二座、如天女、今住吉祭于同殿

旧号波良波宗像、載延喜式神名帳和多都美神社是也、古在白山山、今訛志連江卜云、……

(中略)……雞知住吉八鴨居瀨村紫瀨戸住吉ヲ迁祭ルト云、此神ヲ住吉ノ合殿ニ祭也(與良郷・雞

知村項)

鎮・(往路) 船上得安全、着御鴨居瀨浦在下縣、以紫瀨戸在鴨居瀨浦和多女御子神社ヲ爲行宮……

(中略)……祭海神 豐玉姬玉依姬也、祭于雞知邑白山山、今合祭于同邑住吉社中、

(復路) 從此着御雞知邑、入御行宮、以和多都美神社爲行宮、

紀・白江山 在<sub>二</sub>村東<sub>一</sub>、山腹<sub>三</sub>有<sub>二</sub>住吉神祠<sub>一</sub>、故或<sub>ハ</sub>曰<sub>二</sub>住吉山<sub>一</sub>、山下<sub>ヲ</sub>謂<sub>二</sub>白江<sub>一</sub>、古<sub>ノ</sub>海港也、……（中略）……

住吉神社 所<sub>レ</sub>祭之神一座、彦波瀲武尊、神體一座、所<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>于延喜式神名帳<sub>一</sub>住吉神社 名神大 是也、

頭注 一座 追加 傳<sub>テ</sub>云、自<sub>二</sub>鴨居瀬<sub>一</sub>所<sub>二</sub>遷祭<sub>一</sub>也、事<sub>ハ</sub>在<sub>二</sub>紫泊渡住吉神社之條<sub>一</sub>、……（中略）……

宗像神社 舊號波良地、宗形、神體二座宛然如<sub>二</sub>天女<sub>一</sub>畫<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>祭之神三座、市杵島姫命、湍津島姫命、

田心姫命、所<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>于延喜式神名帳<sub>一</sub>和多都美神社是也、……（中略）……神社舊在<sub>二</sub>同村志連江<sub>一</sub>、後配

祀<sub>二</sub>于住吉神社<sub>一</sub>、（卷之八「與良郷・雞知村」）

笠・（往路）風波治り、鴨居瀬に被爲着。和多女御子の神社を行在所となし給ひ、海神を被爲祭。尤、海神の御魂を含す御鏡を此社に被爲置、後雞知の白江に迁す。

（復路）雞知村へも行宮の跡有之。

明・○郷社 住吉神社 所在 雞知白江山

一、祭神 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、豐玉姬命、玉依姬命。

一、由緒 下縣郡鴨居瀬村紫瀬戸住吉神を移祭す年月不詳、……（中略）……

合併社

○村社 和多都美神社

祭神 豐玉姬命、玉依姬命。

由緒 神功皇后新羅國を征伐し對馬に還御、下縣郡雞知村の行宮に入御し玉ひ和多都美神社を造営し給ひし神社なりしが現今白江山住吉神社に合祭す。

雞知住吉神社に関しては、位置は「鎮」・「紀」・「明」が「白江山」「笠」が「白江」とする（太字部・「紀」は

「白江山」の別名を「住吉山」とも記す。「紀」によれば往古はこの山の下（白江）までが海であったという。神体は「対」が「虚空蔵」、「八」が「鏡」、「大」が「木像」、祭神は「帳」が「神功皇后」、「大」が「彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊」、「鎮」が住吉社に「豊玉姬玉依姬」をも合祀、「紀」が「彦波瀲武尊」、「明」が「彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。豊玉姬命。玉依姬命」とする（一重傍線部）。また「八・大・紀」は、延喜式「神名帳」の下縣の住吉神社をこの社に比定する（一重傍線部）。縁起説は「対」の段階では「由緒不知」であったが、その後「八・略・鎮・紀・笠・明」は、神功皇后が「三韓出兵」往路にて立ち寄った鴨居瀬の紫瀬戸から遷したものであるという（波線部）。著名な大社である難知住吉神社を神功皇后「三韓出兵」に関わらせるために創出したのであろうか。なお鴨居瀬の紫瀬戸の住吉神社に関しては、次号にて論述する。

和多都美神社は、旧号は宗像神社で、旧稿では紙幅の都合上触れることができなかった神社である。位置は「対」が住吉神社の「脇」、「帳」が「脇宮」、「大」が住吉神社と「合殿」、「紀」が住吉神社に「配祀」、「明」が「合祭」とあり、元来住吉神社の本殿内に合祀されていたのであろうか（太字箇所）。また「紀」によれば白江山に遷される以前は同じ難知村の「志連江」に存したという（太字箇所）。なお「大」は「白江」から「志連江」に名称が訛ったとするが誤りであろう。「志連江」は未詳であるが、後述の縁起説では、神功皇后「三韓出兵」譚の復路に於いて、仁位の浜殿神社の後に寄った地であるので、浅茅湾沿岸であろうか。神体は「対」が「宗像金像」、「大・紀」が「天女」の如き神体が「二座」（二重傍線部）、祭神は「帳・紀」が「市杵嶋姬田心姫湍津嶋媛（姫）」、「明」が「豊玉姬命。玉依姬命」（二重傍線部）。なお「明」が祭神を「豊玉姬命。玉依姬命」とするのは、後述の如く社名を「和多都美」と改号しているためであろう。なお「帳・大・紀」は社名を「宗像神社」、「大・紀」は旧号を「波良波（地）宗像」とし、さらに「帳・大・紀」はこの社を延喜式「神名



帳」の「和多都美神社」に比定する。さらに「鎮」・「明」は社号自体を「和多都美」と改名している（二重傍線部）。縁起説は、「対」の段階では住吉神社について「由緒不知」となっており、当然その脇の和多都美神社についても「不知」であつたはずである。それが「鎮」になると神功皇后が「三韓出兵」の帰路和多津美神社を行宮にしたと、「明」では行宮の地に和多津美神社を造営したとする（以上波線部）。

難知住吉神社は、美津島町難知、鶏知川沿いの山の中腹に存し、「難知宮前」のバス停脇に入口がある。入口の左側には二つの石碑（「米田先生報徳碑／長崎縣知事／西岡竹次郎」・「斎藤武光翁頌徳碑／特定非営利活動法人与良郷会一同」）が存す。一番目の鳥居は、石製で、柱には文字は無し。鳥居の右脇には石碑（正面、金字で「住吉神社」・右脇「大正十二年八月吉日」・左脇「豊前八屋町城戸崎利夫建之」裏面「陸軍歩兵大佐城乃先益治謹書」・台の裏面「石工の名」）が存す。中に入っていくと右手にはブレハブ製の建物と、木造瓦屋根の社務所が存す。社務所の前（二番目の鳥居の右前）には注連縄を掛けられた杉の巨木二本が生えている。二番目の鳥居の前には一対の石柱（左右とも前面に「上之町」、また左前には絵馬掛所が存す。二番目の鳥居も石製で、右柱・正面「奉寄進」／前川太右衛門」、左柱・正面「天保十」八月吉日 山城／

／、なお一番目の鳥居から二番目の鳥居までは石畳が続いている。二番目の鳥居の後ろは石段になっており、石段の左右に金属製の手すりのついた玉垣が存す（右の玉垣の一番手前・正面「奉」、左の玉垣の一番手前・正面「献」）。石段の中途左手には石碑（正面「奉献／階段玉垣芳名／宇山忠三郎／岡田浜吉／田中順太郎」、裏面「昭和十二年一月吉日建之」）が存し、さらにその石碑の後ろには上部に鎖のついた大きめの金属製球<sup>6</sup>が存す。石段の上には一対の石燈籠（右・前「御神燈」、左側「大正七年」、左・前「御神燈」、右側「六月吉日建之」<sup>7</sup>）が、さらにその背後には木製・瓦屋根の四脚門が存す（屋根の下には桐紋の彫られた板あり）。門の左後ろには、

木製の四本柱の上に瓦屋根の載った手水屋が覆った石製の手水鉢（正面「奉献」、左面「中野許多郎ノ家内中」、右面「明治三十一年ノ六月吉日」）が、右後ろには石碑（正面「住吉神社改築之碑ノ平成十六年九月十七日落成（以上金字）ノ（以下白字で宮司・宮総代等の名前 省略）」が存す。石段の左には、木々を隔てて石段に並行するように舗装された坂が存し、上がったところ（門と同一平面上）左手には木造銅屋根の倉庫及びその附属棟、正面には土俵の跡が存す。さて門を潜って緩やかに右に曲がる石畳を進むと、石畳を挟んで一对の石燈籠（右・正面「奉献」、左面「平成十六年九月吉日」、後面「藤ノ」）、左・正面「奉献」、右面「平成十六年九月吉日」、後面「藤ノ」、一对の狛犬（右・左面「献」、後面「嶋商業會ノ昭和二年ノ三月吉日」、左・右面「奉」、後面「平石ノ」、一对の石燈籠（右・正面「奉献」、左面「平成十六年九月吉日」、後面「藤ノ」）が存す。石畳の先に石とコンクリートの基壇上に木造白壁銅屋根の拝殿が存し、拝殿の正面には金字で「住吉神社」と書かれた木製額が掛けられている。その後ろには石とコンクリートの基壇の上に本殿へ続く木造白壁銅屋根の廊と木造銅屋根の本殿が存し、本殿の周りを木製白壁銅屋根の塀が囲んでいる。本殿の後ろには石垣が存し、石垣上には本殿右後ろに右から石碑（「奉納ノ随神門一棟ノ大正十五年九月吉日ノ（以下人名列挙）」）、石燈籠（正面「夜燈」）が、そしてその石燈籠の前に一对の円柱の門柱（右・正面「奉」、左・正面「献」）、玉垣が右門柱から右に十七本（九本目から後ろに向かつて並ぶ）、左門柱から左に八本並んでいる（玉垣の右八本目正面には「奉 大正十五年」、その他の垣石一つ一つに正面に人名が刻まれている。人名略）。本殿真後ろには石垣上に石の安置された小石祠が存し、その前に石段が二段ある。拝殿と本殿の左側には本殿後ろのものより高い別の石垣が存し、その石垣の本殿左後あたり、石段六段の上に本殿方向を向いた小石祠が存し、堅石五個（うち二個は貝が附着している）が安置されている。

和多都美神社は、住吉神社拝殿・本殿左側の石垣上に存する。石垣の右手前には「大正七 戊午 三月吉日」建立の石板碑が存する。その左後に石垣に上る石段が存し、石垣の上には一對の石燈籠（右・正面「奉獻」、左面「春田三郎」、左・正面「奉獻」、右面「明治卅九年旧九月十三日」）、木製鳥居が存し、鳥居を潜って玉砂利の道を進んでいくと木製瓦屋根の小祠が存する。これが和多都美神社で、その右手前には巨木の切り株が存する。

#### 四、仁位・浜殿神社

最後に仁位の浜殿神社について見ていきたい。

対・一 濱殿 神跡石 由緒不知

一 社村中三有之 午方二向

大・濱殿 波良波ノ神社跡也、在濱里之平<sup>二</sup>、（仁位郷・仁位村）

鎮・（帰路）而着御仁位邑<sup>一</sup> 在下縣 入御濱殿神社<sup>一</sup> 祭神彦火々出見尊豊玉姫、今称恵比須、

紀・濱殿ノ社 波良波神ノ故宮ノ地、神功皇后還幸之日、憩息<sup>ニ</sup>此社<sup>一</sup>、（卷之七「仁位郷・仁位村」）

笠・（帰路）銘村に、八幡壇・神遣浦・綱島、仁位村等に何れも故跡有之、

仁位の浜殿神社は、位置は「対」は「仁位の」村中、「大」は「濱里之平」とする。「大」・「紀」によれば、仁位の和多都美神社の末社である波良波神社の旧跡であるという（いずれも太字箇所）。神体は「対」によれば「石」、祭神は「鎮」によれば「彦火々出見尊豊玉姫」である（いずれも一重傍線部<sup>3</sup>）。縁起説であるが、「対」の段階では「由緒不知」であったが、「鎮」・「紀」になると神功皇后が帰路立ち寄った場所と位置付けられている。

「笠」も恐らくは同様の言説に基づいているのであろう（いずれも波線部）。往路の厳原の浜殿神社と同様で「浜殿」という建物を想起させる名称からの付会であらう。

仁位の浜殿神社は、仁位の市街地から仁位貝附線を仁位川に沿って行き、大江橋を過ぎた辺りの丘の上（現在の字名は清源寺原）に存する。道に面して石製の鳥居（正面石額「濱殿神社」・左右柱共裏面に文字の痕跡あるも読めず）があり、鳥居を潜り石段を十五段ほど登ると、踊り場左脇に昔の石段のものともしき加工された平たい石が四個存す。更に十五段ほど石段を登る（その石段の左脇に昔の石段の跡らしき石組みが存す）と一對の狛犬（右・正面文字読めず・左・正面「奉納」、一對の石燈籠（右・裏面「明治四十三年九月廿午日」、左・裏面「奉獻 仁位區民中」）が存す。左の石燈籠の左脇に、柱上の石碑（表面「豊玉彦命之御陵墓」、さらにその左の斜面に楠の巨木が存し、楠の根元には、石が十数個敷かれ、幣が四本、空のワンカップの瓶が二つ供えられている。石碑と楠を左に眺めつつ進んでいくと、拝殿の手前に一對の石燈籠（左右とも文字無し）、右の石燈籠の右後ろには上部が瓦で蓋された手水鉢があり、その先に、参道に対して横向きに、海の方に向かって木造瓦屋根の拝殿が存す。拝殿の裏には、拝殿に付属し木製の四本の円柱に支えられた瓦屋根の覆屋で覆われた小石祠（本殿）が存す。参道から拝殿まで、電線と三個の電燈が、また拝殿の正面右側にも一個の電燈が存す。

## 五、小括

以上、対馬中部の対外戦争に纏わる縁起説を持つ南室島神社・雞知住吉神社・その境内社雞知和多都美神社・仁位浜殿神社の四社について、現況の報告をも行いながら縁起説等の概括を行ってきた。いずれも「対」の段階

では対外戦争言説とは関りがなく、やはり近世中期以降に藩内で対外戦争言説が整理されて以降結び付けられるようになったようである。就中神功皇后「三韓出兵」復路に纏わる難知和多都美神社・仁位浜殿神社は、「鎮」において神功皇后が、復路に対馬西岸の木坂の現・海神社社の地に立ち寄るという言説が生成された<sup>9)</sup>際に関連付けられたのであろう。なお本誌次号に於いては鴨居瀬住吉神社・佐賀宗像八幡神社について考察した「後編」を掲載する予定である。

# 註

- (1) 「対馬厳原市街地の神功皇后「三韓出兵」関連神社の縁起説と現況に関して——前篇(「三韓出兵」復路編)——」(中京大学文学部『紀要』五六 二二〇〇三年三月、「同——後編前篇(「三韓出兵」復路編)——」(中京大学文学部『紀要』五七 二二〇〇三年三月)。
- (2) 次号掲載予定の後編を含め、論旨に少しでも関連のある拙論は以下の通り。
  - 「対馬厳原八幡宮縁起説の変容と神功皇后「三韓征伐」譚」(中京大学『文学部紀要』四七 二二〇三年三月)、「対馬・海神社縁起説の形成」(『説話・伝承学』二三 二〇一五年三月)、「対馬に於ける神功皇后「三韓出兵」復路伝承の形成」(『軍記と語り物』五二 二〇一六年三月)、「対馬に於ける神功皇后「三韓出兵」伝承の形成——往路の寺社縁起説を中心に——」(『説話・伝承学』二四 二〇一六年三月)、「長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵『対馬州八幡宮御鎮座伝』について」(『中京大学文学会論叢』二二 二〇一六年三月)、「対馬の「金田城跡」築城・大吉戸神社創建を巡る言説と神功皇后「三韓出兵」譚」(『軍記と語り物』五三 二〇一七年三月)、「対州古蹟集」所収・神功皇后「三韓出兵」復路に関する異伝について」(『伝承文学研究』六六 二〇一七年三月)、「対馬に於ける蒙古襲来周辺言説」(『伝承文学研究』六九 二〇二二年八月)。

- (3) 引用・確認は以下による。「対」＝鈴木棠三著『対馬の神道』（一九七二年一月 三一書房）、「八」＝益軒全集・五（隆文館）、「略」＝長崎歴史文化博物館蔵・近世後期写本（藤子光 仲郷 書入本）、「編」＝対馬叢書・一（東京堂出版）、「帳」＝宗家文庫蔵・宝暦十年写本、「古」＝長崎歴史文化博物館蔵・天保十四（一八四三）年写本、「大」＝宗家文庫蔵・天明年間写本、「鎮」＝宗家文庫蔵本・近世後期写本、「紀」＝対馬叢書・二（四）（東京堂出版）、「笠」＝対馬叢書・四（東京堂出版）、「明」＝対馬教育会編・発行『対馬島誌』（一九二八年七月）。
- (4) 註2前掲拙論の内、による。
- (5) 註2前掲拙論の内、による。
- (6) 「対馬歴史観光ガイドブック——国境の島 交流と国防の最前線——」（一般社団法人対馬観光物産協会編・発行）によればこの金属製の球は、日本海海戦時のロシアの機雷だという。
- (7) 二〇二三年五月の調査時には、左右燈籠の壇上に、陶製の小槌が置いてあった。
- (8) 但し「紀」の「波良波神社」項には、「波良波神社 所祭之神一座、豊玉彦命、神體石、舊號濱殿神社 天平中遷<sub>レ</sub>祠<sub>ヲ</sub>稱ス波良波神社ト、蓋波良波<sub>ハ</sub>地名也、今稱ニ行先殿ト、所載于延喜式神名帳波良波神社是也」と、波良波神社の祭神を「豊玉彦命」とする。後述の現況で柱上の石碑の表面に「豊玉彦命之御陵墓」とあることから鑑みるに、「紀」以降祭神が豊玉彦命に変わったようである。
- (9) 復路に神功皇后が対馬の西岸を通るといふ言説については、註2前掲拙論の内、にて言及した。

追記・貴重な文献の閲覧・掲載を御許可下さった長崎県対馬歴史資料センター・長崎歴史文化博物館、また二〇二三年七月の踏査、及び二三年四・五月の再踏査時にお世話になった対馬の方々に厚く御礼申し上げる。本稿は科学研究費助成事業（基盤研究C・課題番号二一K〇〇三一六・研究課題「対馬に於ける文禄慶長の役言説の生成とその背景」）の成果の一部である。



南室島全景



南室島神社 鳥居と拝殿





雞知・住吉神社 石段から見上げた四脚門



雞知・住吉神社拝殿





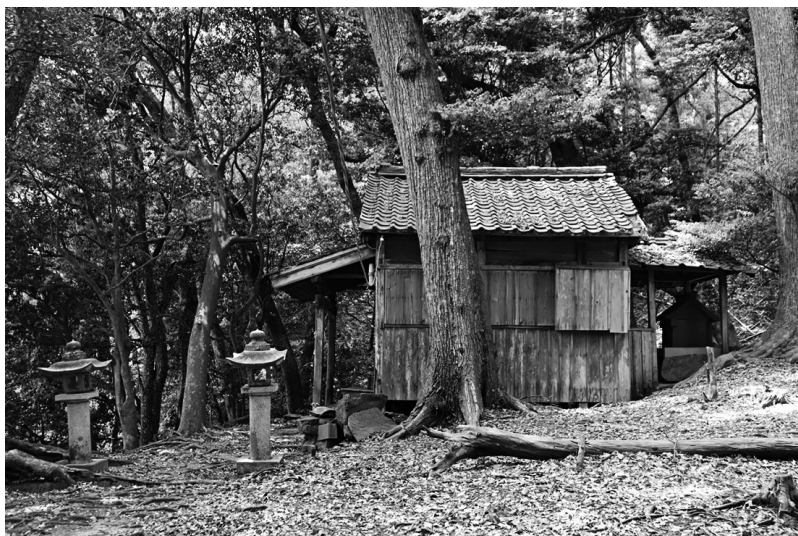
雞知・住吉神社本殿（右後ろの石垣上に石碑・石燈籠・玉垣が見える）



雞知・和多都美神社 右手に見えるのが住吉神社の拝殿・本殿の屋根



仁位・浜殿神社 鳥居と石段



仁位・濱殿神社 拝殿と本殿